
それは偽りの月のように。

境 鏡介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは偽りの月のように。

【Nコード】

N4881D

【作者名】

境 鏡介

【あらすじ】

2人の女子生徒が階段から転落した。ただの事故なのか。何者かが突き落としたのか。それとも『5時55分の怪人』の仕業なのか。不快感解消の為に、栗栖智奈は動く。クリスチーナ軍曹シリーズ第2弾。

ブローグ：作戦会議

「自分は反対です！」

と、クリスチアーノ大佐クリスチアーノと栗栖知亜乃は、テーブルを叩いて言った。

「落ち着きなさい、大佐？理由をいいたまえ」

と、栗栖平八郎准将クリスヘイハチロウは大佐を問いただした。

大佐はショートヘアの髪をかきあげて、「明日は自分は帰還が遅いので、作戦に参加できません。作戦を数日見送ることはできませんか？」

「なるほど…。数日か」

と言って、准将は腕を組むと、上官の指示を仰いだ。

「中将。どうされますか？」

部屋の明かりは消されているが、テーブルの上にある電気スタンドには明かりがついており、人々の顔を照らしていた。電気スタンドの明かりが届かない暗闇で、時計の音が規則的に時を刻んでいた。栗栖麻紀中将クリスマキは数秒の沈黙の後、「…軍曹は3日後、定期試験10日前になります。軍曹は、試験の10日前から試験対策を行うことは皆さんご存知のとおり。ですから、出撃は明後日にすれば問題ないでしょう」

「明後日ならば参加できます」

と、大佐が安堵の表情で言った。

准将は、大佐の言葉に頷いて、「では中将。作戦決行は明後日に決定でよろしいですか？」

中将は両肘をテーブルにつき、組んだ指の上に顎をのせて、「では明後日。我々は当モンブラン基地から『夜桜』に出撃。総員、全力で作戦を遂行せよ。以上」

「Yes, sir！」

准将と大佐は敬礼をして言った。

「…よし。じゃあ、電気つけていい？目悪くなっちゃうから」と、麻紀は立ち上がりながら言った。

部屋の明かりがつけられて、『会議室』は『リビング』に姿を変えた。

「じゃあ、智奈とトーフアも呼んでくるから」

と、知亜乃も立ち上がりながら、「お父さん、今度から智奈達も参加させたら？」

「しかしなあ、下士官がいないほうが雰囲気が出るから」

そう言いながら、栗栖は電気スタンドを消して、「麻紀ちゃんもそう思うだろう？」

麻紀はテレビのリモコンを手にして、「参加してもいいんじゃない？平ちゃん。外食の場所くらい、みんなで決めましようよ」

と、呆れ顔で言った。

第1章：陽は落ちて月は昇る

「ノート貸して！」

火曜日。ホームルームが終わり、帰り支度をととのえていた栗栖^{クリス}智奈^{チナ}に近づく^{カキザキ}と、柿崎咲子^{サキコ}は両手を合わせて言った。

智奈は咲子を見ずに机の中身をバックに移しながら、「…彼氏と遊んでばかりいるから、毎回テスト前に慌てることになるのよ。自力で頑張りなさい」

「そんなに冷たいこと言わないでよ」

と、咲子は手を合わせたまま、「それに、『今の』彼氏になってからは、まだテスト受けてないし」

智奈は竹製の30cm定規で肩を叩きながら、「なにそれ。自慢？」

「違うよ。事実」

智奈達のやり取りに気づいた桃川もみじ（モモカワ モミジ）が、机の間を縫って2人に近づいた。

「どうしたの？」

「咲がノート貸してくれって」

と、智奈が答えた。

もみじは咲子を見て、「あれ？危ないの世界史だけじゃなかったの？」

と、訊いた。

「…化学も危ないんだ。同じ人から2教科分のノート借りるのは、私の良心が許さないし」

「『小心』の間違いじゃない？」

そう言ってから、智奈はバックから化学のノートを取り出して、

「明日の昼休みまでよ。期限厳守」

「助かった！ありがとう。これでなんとかなりそう」

咲子は智奈からノートを受けとると、ウェーブのかかった黒く長

い髪をかきあげた。

「じゃあ、帰ろうよ」

と、もみじが眼鏡のレンズ越しに2人を交互に見て、笑顔で言った。

智奈は定規をバックに突っ込んで立ち上がると、「どこか寄っていく?」

「糖分が欲しい!」

と、もみじが言った。

「『B』 TRAIN』（ビー・トレイン）でも行く?」

「賛成!」

「悪いけど、私はパス。先約があるの」

と言って、咲子は意味あり気に微笑んで、また髪をかきあげた。

「最近付き合い悪いよ?」

と、もみじが拗ねたように言った。

「違う『お付き合い』の方が忙しいのよ」

と、咲子は悪戯っぽく笑いながら、「付き合いはじめが肝心なのよ。上手くだましていかないと、ね」

翌日。智奈が席につくと、もみじが興奮した様子で近づいてきた。

「ねえ、智奈聞いた?」

「おはよう。聞いたって何を?」

と、智奈はバックの中身を出しながら訊いた。

「昨日、咲が階段から落っこちて入院したんだって!救急車も来たって!」

智奈は眉をひそめて、「嘘でしょ?」

「本当だって!見た人に聞いたんだよ?」

そう言って、もみじはVサインを智奈の目の前に突き出して、「

救急車が2台入ってきて、咲が担架に乗せられてたつて！」

智奈は、ポニーテイルにしている髪をいじって、「2台？なんで？」

「それがね……」

そう言いながら、もみじはすり落ちそうな眼鏡を抑えて、「もう1人。別の階段から落つこちたんだって。2年生だったって。この人の方が重症らしいよ」

「同じ日に？珍しいわね」

「そうでしょ？これはやっぱり、『5時55分の怪人』の仕業よ！救急車が来たのが6時半くらいだったらしいから、時間的にもばっちり！」

と、もみじは大真面目な顔で言った。

智奈は呆れ顔で、「あんたは本当に噂とか迷信とか好きよね。今時、学校の7不思議なんて流行らないわよ？」

「でも、そういうのって、あったほうが素敵じゃない？」

と、もみじは笑顔で言った。

智奈はため息をついて、「……入院したら、そんなこと言ってられないわよ。きつとね」

第2章：月光は道を照らす

智奈達の通う高校から、バスで10分程の所にある病院のベッドの上で、パジャマ姿の咲子は大袈裟にため息をついた。

「全治1ヶ月だって！冗談じゃないわよ」

「でも、元気そうでよかったよ」

と、もみじがほっとした様子で言った。

「そうね。鼻とか潰れてるのかと思ってたよ」

と、智奈は咲子の左足のギプスの長さを測りながら言った。

咲子は、智奈の定規を取り上げて、「顔と携帯だけは守りきったの」

「自分で足を滑らせたんでしょ？誇らしげに言わないでよ」

と、智奈は肩をすくめて言った。

「それがね、違うの」

咲子は、そう言いながら髪をかきあげた。

「突き飛ばされたのよ。誰かにね」

「嘘っ！」

冷蔵庫の中をあさりながら、もみじが大声を出した。

「もみじ、声が大きい」

と、智奈はもみじをたしなめて、「足滑らせたのが恥ずかしいからって、嘘はいけないわよ。エイプリル・フルには早すぎるし？」

「嘘じゃないって。本当なの」

と、咲子は定規をもてあそびながら言った。

「詳しく聞かせてよ」

と、咲子の見舞い品のプリンを配りながら、興奮した様子でもみじは言った。

「…図書室から出た後だったの」

と、プリンのフタを開けて咲子は言った。

「咲が図書室？珍しい」

と、もみじは目を丸くして、「読書の秋だから？」

咲子は軽く手を振って、「違うよ。彼氏の趣味。読書家なのよ」

「読書家？咲にしては珍しい」

と言つて、智奈はプリンを口元に運んだ。

「咲はスポーツマンが好きだったじゃない」

「付き合つて、知つたのよ。スポーツマンで読書家だったの」

と、咲子は答えた。

「文武両道？」

と、もみじは訊いた。

「ロマンチストよ」

と、咲子はうんざりした様子で、「モノクロ映画のラブ・ロマンスしか観たこと無いんじゃないかなって、思うことあるわ」

「それで、図書室で逢い引き？」

「…違うけど。似てるかも…」

そう言つて、咲子は言葉を曖昧に切つて、恥ずかしそうに顔を伏せた。咲子の様子を見た智奈は、悪戯っぽく微笑むと、「どうします？桃川さん。恐らく、他人に言つのもためらうくらいの恥ずかしいことしてますよ？」

「そうですね、栗栖さん？柿崎さんは、確実に恥ずかしがつてますからね。期待ができますよ」

そう言つと、もみじは眼鏡を押さえて、「柿崎さん。どうして、図書室に行かれたのですか？」

咲子はプリンを口に運びながら、投げやりな口調で、「本。誰も読んでなさそうな本の中に、待ち合わせの場所とか時間が書いてあるメモが挟んであるの。事前に、メールでどの本に挟んであるのか知らされてね」

「キヤー！」

と、もみじは叫んで、「警報よ！恋愛空襲警報！」

「恋愛爆撃機来襲！非戦闘員は速やかに退避せよ！」

と、智奈も声を張り上げた。

「上官殿！敵軍は恋愛焼夷弾を使用しています！被害は甚大です！」

「話が脱線したから、本題に戻るわよ」

と言いながら、咲子は定規で軽く智奈達の頭を叩くと、「とにかく、私は図書室を出て、階段に向かったの。途中でメールが来て、そのメールを見てる間に階段について。階段を降りようとしてたときも、携帯の画面に集中してたから、後ろに誰かいるのに気づかなかったのよ」

「それで、ドンツ？」

と、もみじは突き飛ばすジェスチャーをして言った。

咲子は無言で頷いて、スプーンをくわえた。

「どう思う？」

「どうって？」

「突き飛ばされたって話」

智奈ともみじは、病院の並木道を歩いていた。足元では、秋の色に染まった落ち葉がカサカサと音をたてている。

「…咲は恋愛がらみで『色々』やってるからね。もしかしたら本当かも」

「なるほどね。じゃあ、もう1人のほうはどうなのかな？」

「もう1人？」

「咲が突き飛ばされたって日に、もう1人。階段から落ちたらしいじゃない」

智奈はポニーテイルをいじりながら、「…さあね。事故か。咲みたいに突き飛ばされたのか」

もみじは眼鏡を押さえて、「もし突き飛ばされたのなら、突き飛ばしたのは人間か。『5時55分の怪人』か」

「…何にせよ、同じ日のほぼ同時刻に2人も落ちたのはひっかかるわね。…それにしても」

言葉を切って、智奈は眉間にシワを寄せた。

「頭にくるわ。どこかの誰かのせいで、今日の昼休みまでにノートが返ってこなかったんだから」

「智奈、顔恐いよ。元々しかめっ面なんだから、自重しなよ」と言っ
て、もみじは楽しそうに笑った。

第3章：時には月が雲隠れ（前書き）

サブタイトル、内容一部変更しました。

第3章：時には月が雲隠れ

咲子を見舞いにいった日の翌日の放課後。智奈は眉間にシワを寄せて、夕陽に染まった階段を見下ろしていた。

「智奈。顔が怖いよ。どうしたの？」

と、もみじは智奈を見て、悪戯っぽく笑いながら言った。

「…何回言えば分かるの？二日酔いよ」

と、目だけをもみじに向けて智奈は言った。

「一日中、不機嫌だったもんね。男子が恐がってたよ」

智奈はもみじの言葉に応えずに、視線を階段に戻した。

「…ここよね。咲が落ちた階段って」

「そうだよ。本校舎。2階。東端の階段。咲から聞いたじゃない」

智奈は左手を手すりに添えて、ゆつくりと階段を降りはじめた。

もみじも智奈に続いて階段を降りた。

踊り場に降りると、智奈は持っていたバックからはみ出していた定規を抜き取り、階段の段の縦の長さを測りだした。

「何cm？」

と、もみじはしゃがみこんで訊いた。

「…24・5cm」

そう言つて、智奈は定規で肩を叩くと、「…意外に短いわね」

「気がすんだところで私の話、聞いてくれる？丸1日かけて私が仕入れてきた話！」

智奈はもみじを睨みつけると、「…聞いてあげるから、大声出さないで」

「了解」

そう言つて、もみじは眼鏡のツルを人差し指で撫でながら、「咲と同じ日に落ちた生徒だけど、名前は奥山秋子。オクヤマアキコ2年4組。この先輩が落ちたのが、西棟の2階。西端の階段ね」

「…たいした情報力ね」

そう言って、智奈は立ち上がった。ゆつたりと階段を昇りながら、
「…つまり、同じ日に、同じ階から落ちたってわけね？」

「そう。しかも、奥山先輩が落ちた西棟って、渡り廊下で繋がって
るじゃない？」

「…そうね」

智奈は階段を昇りきると、廊下に立って、まっすぐに伸びている
廊下の果てを睨みつけた。

もみじは、智奈に近づくと、「つまり！この直接上の西端と東端
の階段で、2人の人間が『5時55分の怪人』の被害にあったのよ
！」

智奈はもみじを睨みつけて、「…聞いてあげるから大声出さない
で、って言ったでしょ？」

「了解」

智奈達は廊下を西棟に向かって歩きはじめた。

「奥山先輩ってね、口が軽いことで有名だったらしいよ。2年生
の女子の間では常識だって」

と、もみじが左手に並ぶ教室を眺めながら言った。

「…なるほどね」

と、智奈はトイレを右手に見ながら言った。

「それでね、奥山先輩は合唱部なの。落ちた日も部活で残ってた
んだって。休憩時間の間に落ちたみたいで、時間が過ぎても帰って
こないから、合唱部の同じクラスの人が捜しにいったんだって」

「…それで見つけた、と」

「うん。でも、救急車をよんだのは別の人。西棟って、理科室と
か音楽室とか、特別な教室ばかりじゃない？一番最初に気づいた
のは、美術室にいた美術部だって。他にも科学部とかパソコン部と
か、西棟に残ってたって」

と、図書室を横目に見て、もみじは言った。

「…奥山先輩、頭を打ったみたい。まだ意識が戻ってないらしい
よ」

「…なるほど。奥山先輩は重症。西棟には人がたくさんいたってわけね」

そう言って、智奈は本校舎と西棟をつなぐ渡り廊下の上で足を止めた。智奈は窓の外に目をやった。

黄昏がグラウンドのサッカー部の影を長く伸ばしていた。智奈は激しく動く影法師達を見つめながら、呟いた。

「…多すぎるわね。容疑者が」

第4章：夜の獣は木陰を好む

「とにかく、話を整理しようよ。私、よく分からなくなってきたから」

喫茶店『“B” TRAIN』（ビー・トレイン）の奥の窓際のテーブルにつくと、もみじは智奈に向かって言った。

智奈はバッグを空いている隣の席に置くと、「…そうね。でも、オーダーを先にすませてから」

「いらつしやい」

と、『“B” TRAIN』のマスターが水の入ったグラスを銀色のトレイに載せて、智奈達のテーブルに近づいてきた。

「…私達の貸し切りみたいになってるわね？」

そう言つて、智奈は客のいない店内を見回した。店内には大きすぎない音量で『イツツ・オンリー・ア・ペーパー・ムーン』がかかっていた。

マスターはグラスを置きながら、「ついさっきまで混んでたんだよ。タイミングが良かったね」

「日頃の行いがいいからね」

と、もみじは笑顔で言う、「マスター。今かかっている曲、いいね」

「ありがとう。…注文は？」

「…オレンジジュース」

と、智奈は答えた。

「私、ダージリンとチョコバナナパフェ」

と、もみじは答えてから、「他にお客さんいないんだから、いつもより綺麗に盛りつけてね」

「…努力するよ」

そう言つて、マスターは頬を掻きながらカウンターに戻った。

もみじは、バッグからノートと筆箱を取り出して、何も書かれて

いないページを開いた。

シャープペンシルの芯を出しながら、「とりあえず、見取り図でも描こうか。実際に動き回るより分かりやすいと思うよ」

「じゃあ、私が描くわ。もみじが描くと線が曲がるしね」

そう言つて、智奈はバツクから定規を取り出した。

もみじは拗ねたように頬を膨らませて、智奈にノートとシャープペンシルを押しつけた。

智奈は定規とシャープペンシルを構えて、「じゃあ、まずはどこから描く？」

「それじゃあ、グラウンドがある側から描こうよ」

「…南側？分かった」

と、智奈は応えた。

もみじは目を閉じて、眼鏡のツルを人差し指でなでながら、「えつと、一番東端の教室が2年5組。西に向かって、次に2年4組。続いて3組」

「2組、1組。続いて図書室。本校舎はここまでね」

と、智奈は定規とシャープペンシルを絶え間なく動かしながら言つた。

「うん。それから渡り廊下を渡つて、西棟だね。左 方角だと南かな？ に曲がると、美術室。更に進むと美術準備室。突き当たりがパソコン室」

と、もみじは目を閉じたまま言つた。

「左に曲がらずに進むと、すぐに行き止まりね。右手 北側ねには階段がある、と。この階段が西端の階段。奥山つて人が落ちた階段ね」

「そうだよ。それにしても、東端から西端まで、時間でどれくらいかかるんだろうね？」

「歩いて1分18秒。人によるから誤差は±2秒つてところね」と、智奈は即座に答えた。

もみじは目を開けると、驚いた口調で、「どうして知ってるの？

さつき、計ってなかったよね？」

智奈は顔を上げずに、「高校に入学した初日に計ったのよ。…本当は距離も測りたかったんだけど。私の持つてるメジャー、5・5mまでしか測れないの。それで時間がかっちゃって。途中で先生に見つかって、止めさせられたのよ」

もみじは目を丸くして、「…智奈は『計ったり』、『測ったり』、『量ったり』するのが本当に好きだよな」

「生まれつきね」

と、智奈は応えてから、「次は北側を描かないと。また東端からでいいよね？」

「うん。でも東側って、ほとんど窓しかないよね？」

と、もみじが智奈に訊いた。

「…そうね。東端と西端、2年2組の正面に階段」

「2年3組の正面にトイレ。それと、西端の階段の横にもトイレ」

「そうね。それぐらいしかないわね」

と、智奈は線を引きながら答えた。

「よしっ！終わり」

と言ってから、もみじはカウンターを見やった。

「…マスター？パフエ、まだ？」

マスターはホイップクリームを片手にカウンターから顔をのぞかせて、「もう少しで出来るよ。悪いね、時間がかっちゃって」

「別にいいよ。それよりも、マスター。さつき流れてた曲。なんて名前？」

「さつきって、いつだい？」

「私達が来た時にかかった曲」

マスターは、低くうなりながら、カウンターの下にあるオーディオをいじった。

流れていた曲が止まり、やがて違う曲が流れはじめた。

「…この曲だね？」

「…そう！なんて名前なの？」

と、もみじは少しの沈黙の後に答えた。

「『イツツ・オンリー・ア・ペーパー・ムーン』って曲だよ」

と言つて、マスターはカウンターにあつた紙製の丸いコースターを、自分の目線の高さに掲げた。

「…紙で出来た月でも、もしもあなたが私を信じてくれるのなら、本物の月になるだろう…。って歌詞がついた曲さ」

「へえ。随分とクラシクな言い回しね。でも、曲の感じは好きよ」

と、もみじは曲に聴き入っているような表情で言った。

智奈はポニーテイルをいじりながら見取り図を眺めていたが、ふと気がついた様子で、「クラシクなラブ・ソングで思い出したけど、咲の彼氏のこと何か知ってる？」

と、もみじに訊いた。

もみじは得意気な表情で微笑むと、「咲の彼氏は前田慎吾^{マエダシンゴ}。2年

5組。サッカー部。実力、学力共に中の下つてところらしいよ。見た目がいいから、女子からの人気はあるって。でも、私の情報網だと咲が初めての彼女みたい。…少なくとも高校に入ってから、ただどね」

「…その前田つて人と、奥山つて人は接点はあるの？もちろん『親しい』意味でね」

「どうして？」

と、もみじが不思議そうに訊いた。

「仮に、奥山先輩と前田先輩が以前、もしくは現在、『親しかった』とする。そして、奥山先輩が突き落とされたと仮定すれば、咲と奥山先輩を突き落としたのは十中八九、同一人物ね」

と、智奈はポニーテイルをいじりながら言った。

もみじは、眼鏡のツルを撫でながら、「…つまり、嫉妬つてこと？前田先輩に好意を抱いている人物の」

「ありきたりかもしれないけどね」

と、智奈は軽く頷いてから、「…もしくは『5時55分の怪人』

の仕業、じゃないの？」

もみじは残念そうに首を振ると、「残念だけど、それは無いの。」

『怪人』が出るのは美術室じゃない？美術部がいたんだから、『怪人』に犯行は無理」

智奈は肩をすくめてから、「とにかく、私は明日の放課後にでも咲に話を訊きにいくわ。あの日気づいたこととか、前田先輩の交友関係とか。ノートも返してもらわないといけないし」

「じゃあ、智奈独りで行ってくれる？私は情報収集に専念したいからさ」

そう言ってもみじは楽しそうに笑って、「奥山先輩と前田先輩の関係、絶対見つけてやる」

「…お待たせ」

と言いながら、マスターはテーブルに近づいた。

「私の最高傑作だよ」

そう言うのと、マスターはパフェをもみじの前に置いた。もみじは真剣そうな眼差しで、パフェを眺め回した。

マスターは、智奈の前にオレンジジュースのグラスを置くと、陶器のポットでティーカップに紅茶を注いだ。

「…どうだい？出来映えは？」

と、カップを置いてマスターは訊ねた。

もみじは視線をマスターに移して、「…いつもと変わらないよ？」

「よく見てよ。バナナが1本多いだろう？アイスも、生クリームも、いつもより多めだよ？」

と、マスターは落胆した様子で言った。

「そうなんだ。ねえ、智奈。どう思う？いつもと、変わって見える？」

智奈はパフェを見ずに、オレンジジュースのグラスを睨みつけて、

「…テキーラ・サンライズに見える」

と、答えた。

第5章：昼の獣は灯りを好む

『“B” TRAIN』での『作戦会議』の翌日の放課後。智奈は咲子の病室にいた。

「…よく覚えてないわ。メールの返事、書いてたしね」

と、病室のベッドの上で、西日に目を細めたパジャマ姿の咲子は言った。

「何も見なかった。何も気がつかなかった、ってことはないでしょう？」

と、智奈は立ち上がって、病室のカーテンを閉めると言った。カーテンで夕陽が遮られ、代わりに蛍光灯が病室を照らした。咲子は手を額に当て、瞳を閉じた。

「…あの日。階段から落ちた前の行動を言ってくればいいの。簡単じゃない」

と、智奈は冷蔵庫を開けてから、「ヨーグルト食べる？」

と、咲子に訊いた。

「食べる」

と、ポーズを崩さずに咲子は答えた。

「…あの日。まず、図書室に行ってメモを取ったのよ」

「なるほどね」

と、ベッドの横の引き出しをあさりながら、智奈は相づちを打った。

「…その後、慎吾の部活が終わるまで暇だったから、図書室で携帯をいじってたのよ」

「『図書』室なのね」

と、小さいプラスチックのスプーンを手にとって智奈は言った。

「何人が図書室にはいたんだけど、気がついたら誰もいなくて。急に寂しくなって。時間も丁度よかったから図書室を出たのよ」

「本も借りずにね」

と、パイプ椅子に座りながら智奈は言った。

「出ると、すぐにメールがきて。読むのに氣をとられて、近くの階段を通り過ぎたのよ。それで、「端の階段でいいや」って思ったの」

「図書室から東端の階段に行くまでの間に、物音とか聞かなかったの？」

と、智奈はヨーグルトを咲子に差し出して言った。

咲子は、目を閉じていたので、差し出されたヨーグルトに気づかなかった。

「…2年生の教室が右に並んでるけど、話し声とかは聞こえなかった気がする。誰もいなかったんじゃないかな？」

「物音とかは？」

「気づかなかったわ」

咲子はそう言って、目を開けた。

智奈は再びヨーグルトを差し出して、「…見てないとは思っけど、その時に奥山秋子って先輩見なかった？」

「誰？その人」

と、咲子はヨーグルトを受け取ってから、少し考えた様子で、「…奥山。聞いたことはないわ。どんな外見してるの？髪型とか教えてよ」

智奈はヨーグルトのフタを開けてから、「…私も知らない。会ったことないし」

「それじゃ、分からない。知ってたところで、あの時は人は見なかったし」

と、咲子はため息混じりに言った。

智奈はスプーンを口元に運びながら、「…咲の彼氏から聞いたこともないわけね？」

咲子は再び手を額に当てて、少し考えてから、「…ないわね」

「…手がかりなし、か」

と、智奈はため息混じりに呟いた。

しばらくの間、智奈と咲子はとりとめのない話をしていたが、智奈の携帯電話が鳴ったことで会話が途切れた。

「栗栖さん。院内は携帯の電源は切ってくださいませんか？」

と、咲子は髪をかきあげて言った。

「次から気をつけますわ。柿崎さん」

と言ってから、智奈は電話に出た。

「もしもし？」

「あ、智奈？もみじだよ」

と、もみじの元気な声が応えた。

「何か分かった？」

と、智奈は携帯をいじりだした咲子を見ながら言った。

「まず、結果から言うけど、前田慎吾と奥山秋子に接点はなし！小学校も中学も違う学校。住んでる地域も逆方向。もちろん、幼なじみってこともないよ！」

と、もみじは大きな声で言った。

智奈は電話を耳から少し離して、「部活の接点もないの？」

「うん。部活は中学の時から、お互いにサッカーと合唱。だから、地域の大会で会うこともなし！」

智奈は片手でポニーテールをいじりながら、「…分かった。またお願いしたいことがあるんだけどいい？」

「どんなこと？」

「調べてほしいことは2つ。1つ目は、音楽室は1階にあるのに、何故奥山先輩が1階より上にいたのか。次に、あの時間帯に2年の教室にどれくらいの生徒が残っていたのか」

「…うん。それって重要な？」

「私にも分からない。確認しておきたいだけ。無理かな？」

「いや、まかせなさい！」

と、もみじは楽しそうな声で、「人の噂も七十五日！2カ月半の

間に起きたことなら簡単に調べられるわ!」

「ありがとう。よろしくね」

そう言っ、智奈は電話を切った。

「…柿崎さん。院内は携帯の電源は切らなくてはいけないのでは？」

と、智奈は咲子に向かって言った。

咲子は携帯のディスプレイから智奈に視線を移すと、にやっと笑った。

「…ひっかかったわね？」

そう言っ、咲子は智奈に、電源の切っである携帯の真っ暗なディスプレイを見せつけた。

第6章：月沈み西が夜明けの時告げる

智奈が咲子を見舞いにいった翌日の昼休み。ざわついた教室の窓際、最後尾の席について、紙パックのオレンジジュースを飲んでいた智奈に、もみじが駆け寄った。

「ただいま」

と、息をはずませてもみじは言った。

「…おかえり」

ストローから口を離れた智奈は、隣の席の椅子を引き寄せているもみじに向かって、「どう？何か分かった？」

「一口ちょうだい」

智奈の問いかけに答えずに、智奈の持っている紙パックを見て、もみじは言った。

智奈は無言でパックをもみじに差し出した。

もみじは、パックを受け取ると一口飲み、「昨日、智奈が言っていた2つのこと。両方とも分かったよ」

智奈は少し驚いた様子で、「本当？さすがね」

もみじは得意そうな顔をして、「学内で私に調べられないことはないよ！」

「それじゃあ、報告してくれる？」

「了解！」

もみじは片手で眼鏡のツルを撫でながら、「…えっと、まずは2年生の教室にどれくらい残っていたか、だったよね？答えはゼロ！」

「…ゼロ？誰も残ってなかったの？」

と、智奈は眉間にシワを寄せて訊いた。

「智奈、顔が怖いよ」

と、もみじは言ってから、「咲が落つこちた少し前にね、先生達が見回って教室に残ってる人達を帰らせたらしいんだ。もちろん、部活をやっていた人達には関係ないけどね」

智奈はポニーテイルをいじりながら、「…なるほどね。じゃあ、あと1つのほうは？」

「奥山先輩のほうはね、教室に忘れ物したらしくて、取りにいったみたいだよ。合唱部の人が言ってた」

「教室にいったの？」

と、智奈はもみじに訊いた。

「そうだよ」

もみじは答えてから、ツルを撫でるのを止めた。

智奈は何も置かれていない机の表面を睨みつけて、ポニーテイルをいじっていた。

もみじは智奈を見ながら、オレンジジュースを飲んで、「…しかし、また難しくなっちゃったね？教室には誰もいなかった。咲から聞いた話だと、図書室にも誰もいなかったって、今朝智奈言ってたよね？」

智奈はもみじの問いに答えずに、机を睨みつけていた。

「そうになると。犯人は通りすがりの人ってなるよね？たまたま、偶然、通りすぎた人。誰もいないんじゃない？」

と、もみじはストローをくわえて言った。

智奈はポニーテイルをいじっていた手をとめて、「…そういうことか」

と、呟いた。

「どうしたの？」

と、もみじが不思議そうな顔をして言った。

「…確率の問題。単純な見落とし」

そう言ってから、智奈はもみじを見た。

「…放課後、犯人に会いにいきましょう。それと、そろそろジュース返してくれる？」

放課後、智奈ともみじは図書室にいた。室内には、智奈達の他に女子生徒が1人だけ残っていた。窓の外のグラウンドから、運動部のかけ声が聞こえていた。

智奈ともみじは向かいあつて席についていた。もう1人の利用者は智奈達とは離れた席についていた。

しばらくして、その女子生徒は広げていた教科書やノートをまとめると、バッグに詰め込み、席を立った。

その動きに合わせるように、智奈達も立ち上がった。

女子生徒は受付の前を通り過ぎ、出入口の引き戸を開けて廊下に出た。

智奈達は女子生徒が廊下に出たことを確認すると、ゆっくりと受付に向かった。

受付では図書室の司書教諭がパソコンに向かって、何やら作業をしていた。

智奈がもみじに目配せをすると、もみじは出入り口の引き戸に近づいて、鍵をしめた。

「…すっかり忘れていたわ。たとえ利用者がいなくても、図書室が開いている限り、あなたはここにいてるってことを」

と、パソコンに向き合っている女性に向かって智奈は言った。

まだ若い司書教諭は、眼鏡をかけた顔を智奈に向けた。

「…何を言っているの、あなた？利用者が少ないことの皮肉のつもり？」

と、冷たい響きを感じさせる声で言った。

「違うわ。4日前、先生は柿崎咲子、奥山秋子。以上、2人の生徒を突き落としましたね？」

と、智奈は無表情で言った。

女教師は目を見開いて、キーボードを叩いていた指を硬直させた。

「何を言ってるの？あなたは…」

「あなたしかいないのよ」

と、智奈は教師の言葉を遮って言った。

「確率の問題よ。咲を狙ったのならつけるか、待ち伏せをしなくてはならない。しかし、咲が出るころには図書室に利用者はなく、最も潜みやすい教室は先生達によって無人にされていた。あと隠れられるのはトイレだけど、不確定要素が多すぎる。手前の階段で降りられたら、おしまいだしね」

智奈は、そこで言葉を切って、「…それに、咲が東端の階段を使ったのは偶然。待ち伏せなんて不可能なのよ」

教師は智奈を見つめて、口を一字に結んでいた。

「時間と、咲が落とされる直前まで図書室が開いていたことを考えると、奥山先輩を先に突き落とすことは不可能。だから、あなたが狙ったのは、あくまで咲1人だった。おそらく、奥山先輩は現場を目撃したのか、あなたが現場の辺りにいたことを見たがために突き落とされた。そうでしょ？」

「…まるでシャーロック・ホームズね。大した想像力だわ」と、教師は落ち着いた声で言った。

「…私は推理したつもりはないわ。想像したつもりもない。ただ、現実と結果から不可能、不確実なものを消していっただけよ。まあ、奥山先輩が落とされた理由は適当に当てはめてみたけど」

と、智奈は相変わらずの無表情で言った。

「…もし、私がその2人を突き落としたとして、証拠はあるの？」と、教師は智奈からパソコンに視線を移して、言った。

「証拠はないけど、証人ならいるわよ」

と、智奈はもみじをちらりと見て言った。

もみじは、それまで黙ってドアの所に立っていたが、「…奥山先輩の悲鳴が聞こえた直後に、渡り廊下を本校舎の方に向かっていて先生を見た美術部の生徒がいるんです。その人は、先生が救急車を呼びにいったんだと思ったらしいです」

教師はもみじを見つめた。もみじは教師を見つめ返した。智奈は窓に目を向けた。室内は時を刻む、時計の音とグラウンドからのか

け声が聞こえるだけだった。

長い沈黙の後、女教師はため息をついた。

「…そうか。美術室を出れば、窓ガラス越しに渡り廊下は見られちゃうのか。あの時はここに帰るのに夢中だったから…」

智奈は教師に視線を戻した。

教師は椅子から立ち上がり、窓に向かった。

「…好きだったのよ。前田君のことが、ね」

窓の外を見つめて、教師は言った。

「彼は他の男とは違ったわ。彼には教養と品があった」

智奈ともみじは、窓の外を眺めている教師を、無言で見つめていた。

「彼に彼女ができたことはすぐに分かった。しかも、教養もなさそうな女。許せなかった。だから、突き落としたのよ」

「…奥山先輩はどうして？」

と、もみじが訊いた。

「どうして突き落としたのか？簡単よ。見られたから」

そう言って、教師は振り返って智奈達を見た。「あの女を突き落とした後。ここに帰ろうとしたら、生徒が1人、トイレから出てきて、西棟に向かって走ってた。見られた、と思ったわ。だから、追いかけて突き落としたのよ」

智奈はドアに近づくと、鍵を開けてドアの取っ手に手をかけた。

「…他人の色恋にそれほど興味はないわ。あなたのミスは、『私の』ノートを持ってる咲を突き落としたこと。選んだ日、タイミン
グが悪かったのよ」

そう言ってから智奈は引き戸を開けた。

「…まあ、持ってなくても調べたけどね」

と、智奈は振り返って言うと、図書室を出た。

エピソード

「戦場において補給線がたたれることは、すなわち敗北を意味する。それ故に、補給線を確保し、維持することが戦況を大きく左右するのだ！」

と、ビールのグラスを片手に栗栖平八郎は黒い子ネコに向かって言った。

「ニヤ」

トーファは栗栖を見上げて、短く鳴いた。

「お父さん。恥ずかしいから、もっと声を小さくして」

と、栗栖知亜乃が父親を冷たく見て言った。

智奈達の学校の定期試験が終わった日、咲子の退院祝いが栗栖一家ともみじによって、居酒屋『夜桜』で行われていた。店内は3分の2ほどの席が埋まっていて賑やかだったが、智奈達が陣取っていた奥の座敷が最も騒がしかった。

「マスター。次は焼酎！ボトルで持ってきて！」

と、徳利を振りながら栗栖麻紀は言った。

「マスター！ボトルは2本ね！あと、氷もちょうだい」

と、知亜乃が追加した。

「…相変わらず、元気ね。智奈の家族は」

と、ギプスをつけた片足を伸ばして座っていた咲子は、烏龍茶を片手に言った。

「そうだよ。智奈からは考えられないくらい元気だよ」

と、焼き鳥を頬張りながらもみじは言った。

智奈は無言で、オレンジジュースの入ったグラスを傾けた。

もみじは、焼き鳥の串を皿に置いてから、「…そう言えば、司書教諭の月岡先生、学校辞めたらしいよ」
ツキオカ

智奈はグラスをテーブルに置いて、「…そう」と、呟いた。

咲子は曖昧な表情をして、「まあ、私も脚折ったけど、命に別状はなかったし、奥山って先輩も意識は戻ったらしいし。多少は氣まずいけど、辞めることはなかったんじゃない？」

もみじは驚いた顔をして、「寛大だね」

「恋と戦争は手段を選ばない、っていうじゃない？」

と、咲子は髪をかきあげて言った。

「何？戦争？」

「お父さん。グラスが空よ」

と、智奈は父親にビールを注いでやりながら言った。

「まあ、智奈にばれちゃったし。居づらくなっただよ。きつ」と、もみじは唐揚げに箸を伸ばして言った。

「お待たせ！焼酎、2本！あと、氷ね！」

と、熊のような風貌をしたヒゲ面の『夜桜』のマスターが、ボトルと氷の入ったバケツを持ってきた。

麻紀が嬉しそうな表情で氷をグラスにいれた。知亜乃が何事かをマスターに耳打ちすると、マスターは楽しそうに頷いてキッチンに戻っていった。

「…智奈にばれたって言うても、証人がいるって話は『ハッター』だったんでしょ？それに、奥山先輩は現場を見たのか、見なかったのかは分からないんでしょ？」

と、咲子は、仲良く焼酎を注ぎあっている知亜乃と麻紀を眺めて言った。

「奥山先輩が見たのかどうかは分からないわ。でも、『ハッター』は『ハッター』でも、自信のある『ハッター』よ」

と、智奈は座布団に座り直して言った。

「奥山先輩が落とされてから、発見までの時間は短かった。逃げられる所は5つ。西棟の3階に逃げるか、転げ落ちた奥山先輩の横を通って1階に逃げるか。美術室の方に逃げるか、本校舎の方に逃

げるか…」

「それから、最後の1つは階段横のトイレに逃げ込むか、だよね？」

と、もみじが焼酎のボトルをまじまじと見ながら、智奈の言葉を引き受けて言った。

智奈は頷くと、「3階に逃げると、部活動をしていた生徒達に見つかる。1階に行っても同じ。美術室の方に逃げないのは疑問の余地はない。あと逃げ込むのはトイレだけど、大騒ぎしてる現場の真横に長居できる？そうになると、残るは本校舎の方向」

「なるほど」

と、咲子は相づちを打ってから、「そうになると、1番西棟に近いのは図書室。逃げ込むとしたらそこか」

「そういうこと」

そう言ってから、智奈は麻紀に向かって、「お母さん。それ、一口ちょうだい」

「強いわよ。止めたほうがいいと思うけど？」

と、言いながら麻紀は焼酎のグラスを智奈に渡した。

智奈は一口飲むと、顔をしかめた。

「…ビールよりは美味しい」

そう言つと、智奈は麻紀にグラスを返した。

「まだ早いわよ。もっとお酒に慣れてからになさい」

と、微笑んで娘に言つと、麻紀は焼酎を一気に飲み干した。

「…あんなに飲むのに、どうして智奈のお母さんって痩せてるのかしら」

と、咲子は首を傾げて言った。

「お父さんも太ってないし、頭もさびしくないよね。背も高いし」と、もみじはトーファに熱弁をふるう栗栖を見ながら言った。

「お姉さんは格好いいし」

「その上、かわいいし」

「…もう止めてよ。恥ずかしい」

と、智奈は、咲子ともみじの『褒め合戦』を制止して言った。

「…そういえば、咲。彼氏とはどうなったの？」

と、もみじは咲子を見て言った。

咲子は烏龍茶のグラスを飲み干して、「…別れたわ」

「噓！」

もみじは焼き鳥を食べようとしていた手を止めて、「どうして？」

「…いい加減に、文学的恋愛にも飽きたの。だって、あれは私に夢中なのか、口説いてるに自分に夢中なのか分からないから」

そう言ってから、咲子はギプスを軽く叩いて、「脚が治ったら、また新しい恋でも見つけるわ」

もみじは感心した表情で、「タフね」

「何？咲ちゃん、彼氏と別れたの？」

と、話に気づいた知亜乃が、焼酎を片手に話しかけてきた。

「ええ。そうなんです。知亜乃さん」

と、咲子は悲しそうな表情をつくって言った。

知亜乃は咲子の頭を撫でてやりながら、「よしよし。そんなあなた達に、お姉さんからプレゼントがあるの」

「あなた『達』って、私ともみじは関係ないじゃない」

と、智奈は訂正した。

「細かいことは気にしない」

そこに『夜桜』のマスターが銀のトレイに3つのカクテルグラスをのせてやってきた。マスターが智奈達『未成年』の前にグラスを置くのを見ながら、「このカクテルはノン・アルコール・カクテル。アルコールは入ってないわ。入ってるのはオレンジジュース、レモンジュース、パイナップルジュースの3つ」

「甘くて美味しい！」

もみじは一口飲むと、「知亜乃さん。コレ、何て名前ですか？」

知亜乃は焼酎のグラスを口元に運びながら、色っぽく微笑んで、

「…シンデレラ・カクテルよ」

「シンデレラ…」

「また、随分とクラシックね」

一口にグラスを飲み干した智奈は、そう言ってから、マスターに向かつて言った。

「…マスター。テキーラ・サンライズをちょうだい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4881d/>

それは偽りの月のように。

2010年10月17日06時31分発行